

卒後教育に魅せられて

平田 京子

神奈川県立看護教育大学校教員

私の所属する専門看護学科母子看護課程には、毎年、全国からやる気と情熱を持った助産婦たちが集まってくる。それぞれの進学への動機はさまざまである。ある学生は専門的な学習を求め、またある学生は働く施設で悩みながら燃え尽き寸前となったため、また他の学生は後輩指導、新人教育に苦しんでなどである。

卒後教育の魅力の第一は、学生の限らない力を6か月間見守ることができる点にある。たとえば、学生20人の宝探しにどのように関わりあい、1人1人にどんな力が潜められているか発掘できるかを、意識して見守っていく楽しみである。それは、この卒後学習を通して、みんなが自分の玉手箱を確実に見つけるまでのプロセスにある。つまり、彼女たち1人1人が自ら努力し、クラスの仲間と育み築き作りあげ、予測もできなかった偉大な力、実力という自信を生み出す過程を見せてもらえるからだ。

第二は、ともに燃えることができるという点である。6か月間の中では、次々に課題に追われ、彼女たちは息つく暇もないという。そのほとんどはグループワークなのだが、全くというほど手を抜かない。毎日夜遅くまであちこちでワーキングが続く。その光景は見事で圧倒される。アドバイザーとして参加しながら、私はいつの間にか熱中し、ともに燃えることが多い。これはそこに、参加した者にしかこの喜びはわからないだろう。

第三の魅力は、仲間のネットワーク作りができるということである。基礎教育と違い、学生はすでに助産婦の資格を有しているので、学生が数人集まるとタイムリーな情報交換ができることになる。これに最新の医学、看護情報がインプットさ

れ、分析能力がプラスされれば、もう言うことはない。クラスの仲間は全国から集まっているから、卒業後は全国で活躍することになる。

毎年ほぼ20名の卒業生が生まれ、すでに20年を経過している。これから、3年で60名……、10年で200名……、20年で……、将来は全国にたくさんネットワークができる。この力ある仲間のネットワークが活躍すれば、将来の母子看護界は明るく希望に満ちてくる。

卒後教育の魅力について述べてきたが、決して楽しいことばかりではない。卒後の教育は常に専門性と実践展開能力が求められるからだ。コース中はもちろんのこと、準備や評価も含めると気が休まる時はほとんどない。だから、卒後教育の大変さはこれに参加した者でなければ、それに倍する喜びとともにわかってもらえないかもしれない。

しかし、卒業時に彼女たちが玉手箱を開ける時、その感動と自信に触れる時、それまでの苦労と疲労はふっとんでしまう。玉手箱には、卒業後の各自の具体的な課題と、6か月間の自らの努力と成長と栄養剤がたくさん詰まっているからだ。これこそ学生の財産である。

せっかく手に入れた能力と財産を各施設で実践し、力を発揮していかれることを期待するが、環境によっては困難もあるようである。卒業生の今後に期待するとともに、私も負けないように努力と研鑽を深めていきたいと思う。

私はこれからも学生を愛し、卒業生と連携をとり、できるかぎり助けあいながら、魅力ある助産婦、社会のニーズに応えられる有能な助産婦育成を目指したいと考えている。